Edmund Husserl, Zur Phänomenologie des Inneren Zeitbewusstseins 1928 表象メディア論A

E.フッサール「内的時間意識の現象学」立松弘孝訳

第一章　時間の根源に関するブレンターノの説

第三節　根源的連合

では次に時間の根源に関するブレンターノの説に依拠して、先に提起した諸問題への通路を獲得したい。ブレンターノは根源的連合のうちに、すなわち《例外を認めぬ法則に従い全く無媒介的にそのつどの知覚表象に結合する直接的な記憶表象が成立する》*ということのうちに、すでにその解決を見出したと信じている。われわれが見たり聞いたりして一般に何かを知覚する場合、知覚されたものは、たとえ変様するにしても、きまってある時間われわれに対して**現在しつづけている。強度や充実のように、時に応じ多少の程度の差を伴って現われる変化を度外視しても、さらにそれらとは別のきわめて特徴的なある変化が必ず確認される。すなわちそのような仕方で意識内に残留するものは多少の差こそあれ過去のものとして、いわば時間的に後退したもの（Zurückgeschobenes）としてわれわれに現出することが確認されるのである。たとえばあるメロディーが鳴り響いている場合、その個々の音は刺激の停止、ないしは刺激に誘発される神経運動の停止とともに完全に消失するわけではない。新しい音が鳴り響くときには、先行した音がすでに跡かたもなく消失しているというわけではない。もしそうでないとすれば、当然わ

れわれはあい前後して継起する音の相互関係に気づくことができず、各瞬間ごとに一個の音を所有し、また二個の音が鳴る中間の時間におそらく一個の空虚な位相†を所有することになろうが、しかしメロディーの表象はけっしてもちえないであろう。しかし他方、意識内に音の表象がそのまま残留するということもありえない。かりにそれらの音の表象が変様されずにいるとすれば、われわれはメロディーの代わりに幾つもの同時音の協和音（アコルド）を、というよりもむしろ、すでに鳴り響いている音のすべてを同時に鳴らす場合に聴取するような不協和音の喧騒を所有することになるであろう。あの独特な変様が起こり、〔音を〕産出する刺激が消えた後もそれぞれの音響感覚が時間的被規定性を備えた類似の表象をそれ自身の内から呼び覚まし、そしてこの時間的被規定性がなおも変化しつづけることによって、そこに初めてメロディーの表象が生まれうるのであり、個々の音はこのメロディーの内部でそれぞれ一定の場所と一定量の時間を所有しているのである。*

したがって一般的な法則として、与えられた各表象にはおのずから一連の表象が連続的に結合しているのであり、そしてその各表象は先行表象の内容を再生し、しかもその際、新しい表象に常に過去の契機を付加するのである。

このようにしてここでは想像が独特な仕方で生産的であることが証示される。想像が諸表象の真に**新しい一つの契機、すなわち時間契機を創造する顕著な例がここに見られるのである。このようにしてわれわれは想像の領域に時間表象の根源を発見したのである。***ブレンターノ以前の心理学者たちはこの〔時間〕表象の本来の源泉を見出そうと努めながら、それに失敗した。その失敗は主観的時間と客観的時間とを、確かにこれはよくありがちなことではあるが、この両者を混同したためであり、このような混同が心理学者たちをまどわせて、そのため彼らはここに伏在した本来の問題を見きわめられなかったのである。多くの****人が、時間概念の根源の問に答えるにはわれわれが